

北海道胆振東部地震 から 5 年が過ぎて

大変な正月になってしまった。

能登半島の大地震、羽田空港の衝突炎上事故、北九州市の大規模火災。災害がこれほど連続する正月を経験したことはないが、穏やかなはずの正月に被災された方々の安否やその心情を思うと、沈痛な思いを抑えられなかった。そして、北海道胆振東部地震のことを思い出してしまった。

2018 年 9 月 6 日午前 3 時 7 分、私は苫小牧の自社にいた。別件の対応に苦勞しており、仮眠を取るべくようやく午前 3 時前に寝付いたのだが、その直後に凄まじい揺れでたたき起こされた。大地震の発生をすぐに理解したが、前後不覚でしばらく身動きがとれなかった。その後、間もなく停電となり、非常灯が点灯する中、もたもたと社内を見て回った。しかし、不思議なことに、花瓶 1 つを除いて、本棚やモニターなどは倒れていなかった。「気のせいだったのか？ 実は大した揺れではなかったのか？」とも思ったが、その後、かかり始めた緊急対応要請の電話によって、相当な被害であることを覚悟した。

午前 5 時半から現場に出た。苫小牧市内は目立った被害はみられなかったが、東に向かって走るとつれて、路面の変状やソーラーパネルの倒壊などが目につくようになった。最初の目的地であるむかわ町では被害が甚大で、特に無数の住宅が倒壊している様子には、思わず目を覆いたくなった。19 人が亡くなった厚真町吉野地区に入ったのは翌日の早朝だった。あまりに広範囲の地すべりに呆然としていたところに、通りかかった 1 人の陸上自衛隊の方が蒼白な面持ちで「こんなんみたことあらへん」とつぶやいていたのが忘れられない。

田中 雄太(たなか ゆうた)

技術士(建設/総合技術監理部門)

公益社団法人 日本技術士会北海道本部
地方委員会 道央技術士委員会 代表
株式会社タナカコンサルタント



このように、発災直後は精神的にかなり動揺していた。しかし、現場では意外と冷静に対応できていたと思う。淡々と被害状況を整理しつつ、応急対策を立案・報告を繰り返していた。震源からほど近い橋りょうで、L2 を想定して設計された支承アンカーボルトの破断を見つけたが、驚きつつもその知見を当時進めていた別の橋の設計に活かそうと反射的に考えたくらいである。混乱下において、客観的な事実は技術的な思考を助長するのかもしれない。

この地震の直後は、固定電話がかかりにくく札幌方面に応援を要請するのに苦勞をした。しかし、携帯電話による通話・データ通信にはほぼ支障がなく、しばらく続いたブラックアウトにおいても、現地との情報共有において非常に重宝した。この経験を踏まえ、老朽化した社内固定電話の廃止に伴い、当社では全社員にスマホを貸与している。

道央技術士委員会では、発災から 5 年が経過した昨年秋に、北海道開発局室蘭開発建設部苫小牧砂防海岸事務所および厚真町のご協力のもと、厚真町内の復興現場の見学会を開催した。各方面のご尽力により復興が着実に進んでいる様子や、大地震による地形変状の凄まじさを改めて認識する大変有意義な見学会となった。今後は、これまでの施設見学会を中心とした活動に加えて、技術士会の一地方組織として地域防災を意識した活動を展開すべく検討しているところである。

「天災は忘れた頃に…」は寺田寅彦の言葉であるが、この正月に感じた沈痛な思いや北海道胆振東部地震の経験を忘れることなく、日々を過ごさなければならぬと思っている。